

宮崎県立看護大学大学院看護学研究科 平成30年度修士論文要旨

医療型障害児入所施設に長期入所する子どもを持つ親の育児プロセスと望む支援 ～親への半構成的面接内容の分析から～

大河原真知子（応用看護学）

【キーワード】 医療型障害児入所施設・長期入所・親の思い・育児プロセス

本研究の目的は医療型障害児入所施設に長期入所している子どもを持つ親の思いや背景を知り、離れていても子どもの成長を実感できる看護師の関わりや望む支援を明らかにすることである。研究参加者は医療型障害児入所施設に1年以上長期入所している子どもを持つ親5名である。研究デザインはグラウンデッド・セオリー・アプローチを参考とした質的記述的研究である。参加者へインタビューを実施、内容をデータ化し、親の育児プロセスについて分析・カテゴリー化を行った。本研究は宮崎県立看護大学研究倫理審査委員会承認(第16号)、医療型障害児入所施設A倫理審査委員会承認(番号2018-34)を得て実施した。

結果、以下のことが明らかになった。

※<>カテゴリー【 】概念を示す

- 1.<入所選択の背景>には【子どもの生活と家族の生活の調整困難】【家族構成員の変化】【育児支援の乏しさ】があり、日常的な体調管理が必要な重症心身障害児の生活と親自身の仕事調整困難、きょうだいの誕生や成長による親役割増大、親主体で支援の少ない在宅での育児があった。
- 2.<入所に対する自責の継続>入所後4～9年間経過していても、親自身で養育できないことへの自責の念は抱き続けていた。子どもに対しては申し訳ない気持ち、施設に対しては感謝の気持ちがあった。
- 3.<家族としての成熟>面会や外泊を行い子どもに

関わる時間を作っていた。その際、子どもの発達や関心に注目し【その子に合わせた意識的な関わり】をしていた。また、【きょうだいの関わり】も大切にしていた。きょうだいの関わりは、年齢やきょうだいの成長により変化していた。

4.<入所後の子どもの成長>すべての親が入所前からの長期的な視点で【子どものゆるやかな成長を感じとる】ことができおり、【その子なりさらなる成長を望む】ことへと繋がっていた。また、親自身が教えていないことができるようになっていくことから【成長に家族以外の関わりを感じとる】ことができている。

5.<子どもへのタイムリーな関心と将来への視点>入所を選択した困難さが入所により解決しており、【現在困っていることはない】と考えていた。親は【子どもの生活の様子を知りたい】【子どもの体調の変化をタイムリーに知りたい】と思い、その支援を望んでいた。また、【有限施設なので18歳以降を考える】将来への視点を持っていた。

医療型障害児入所施設に長期入所する子どもを持つ親の育児プロセスは<入所選択の背景><入所に対する自責の継続><家族としての成熟><入所後の子どもの成長><子どもへのタイムリーな関心と将来への視点>が抽出された。以上より、それぞれの家族の背景を十分に理解し、親の思いを十分配慮した上で、子どもの育ちを共有し、気持ちの負担感が軽減できるような関わりが必要と言える。そして、きょうだいを含む家族全体を看護の対象と認識し、子どもの日常生活を伝え続け、親が子どもにとって最善を選択していけるような支援が望まれる。